

を強くしようという意味においてルックイーストで、これはまさしくルックイーストを経済外交であり外交政策として捉える捉え方だろうと思います。

それから、吉村さんが紹介された「失敗を学ぶ」ということについては、まさしくそのとおりです。数年前、明治大学にマハティール首相が来たとき「ルックイースト政策を続けるのか」との質問に対して、「いや、われわれは失敗からも学ぶことがある」と言って会場が大爆笑になりました。「だからこそ日本には早く回復してほしい」というメッセージをくれました。

私自身は、穴沢さんの説明がとてもしっかりくる思いでした。穴沢さんは資料の中で「工業政策の模倣まで」とおっしゃいました。日本社会ではルックイースト政策というのは単なる人材育成政策から徐々に拡大解釈されてきたのではないかと理解しています。

つまり最初は人を通じて人を育てることによって日本の経験や日本人や韓国人が成功した価値観を学ぼうというものだったのが、1985年の円高で一気に日本の企業が東南アジアに出て行って、マレーシア経済に大きなプレゼンスを示して、その中で日本企業あるいは経済モデルの発信、あるいは日本の産業モデルがマレーシアの発展のモデルになりうるというかたちで、ルックイーストポリシーの中身が、日本側の解釈とマレーシア側の解釈あるいは狙いとは変わってきているのではないかと考えています。

■ 経済関係、人材育成、開発モデル ——多面的に考えて「ネクスト」を考える

代表的なのは、中小企業育成政策や日本の通産省が作った機械産業振興法を真似して導入した経緯です。マレーシアが1960年代に中小企業について議論をします。これは企業規模が小さいという意味においての中小企業を作ろう、資本もそんなに集まらない、雇用もそんなにたくさん最初からできない、だから大企業に対して中小を育てていずれ大企業にしようという話ですが、いつのまにかマレーシアを含め東南アジアでも裾野産業や部品産業としての中小企業という議論になり、それがモデルとなって、ルックイーストの一つの柱になっていったのではないかと思います。

一つひとつ挙げればきりがありませんが、経済関係としてのルックイーストと人材育成政策としてのルックイーストポリシー、それから開発モデルとしてのルックイーストポリシーという、多面から考えて次のネクスト・ルックイーストポリシーを考える必要が出てくるんじゃないかと思います。

■ マレーシアの経済、高等教育、サービス産業 ——未来を考える際の三つの前提

その際に考えなければならないことが三つぐらいあると思います。一つはマハティール時代、ルックイーストポリシーが一国完結型の開発モデルをベースとしてマレーシア一国で開発を成し遂げるという立場での人材育成であり産業政策を唱えていたという大前提です。

これに関してコメントは必要ないと思います。現在のマレーシアを取り巻く状況が違うということです。端的に言えば、AFTAが動いていく中でマレーシア経済がどうなるかという大前提をもとにルックイーストポリシーが出てくるかと思っています。

それから、マレーシアが模索しつつも大きくマレーシア経済が変わっているわけです。どうなるかわかりませんが、民間の高等教育がハブになろうとしている。じゃあ、それと日本の高等教育はどう関わっているのか。これは実は天に唾をつく話で、日本の大学教育はどんどんアイソレートされておりまして、スーパー・ガラバゴスになりつつありますので、大学に勤めている私としては大変困るわけです。

それからもう一つ、さきほどのハラルの話はとてもいい話でした。マレーシア経済が製造業からサービス産業化して、サービス経済化が今ものすごい勢いで進んでいることは皆さんご存知のとおりだと思います。そうすると、マレーシアの基幹産業としてのサービス産業と日本がどう関わっていくのか、なんていうことも一つの議論になるのではないかと思います。

コメント2

山本 博之
京都大学



私からは、JAMSのルックイースト政策に関するこれまでの議論や今日のシンポジウムでの発表をうかがって考えたことを、時間の限り二点か三点お話ししたいと思います。はじめに2つのことをお断りしておきます。私のコメントは社会・文化面が中心となって

経済的な話ではないこと、そして、必ずしも日系企業の儲けや1人1人のマレーシア人の儲けに繋がる話にならないかもしれないことです。

■ マレーシアのQCが世界から信用を得た 結果としてのハラル認証

さて、山本課長から出された、世界にない技術をマレーシアが生み出す土台をマレーシア自身が作ることへの協力が必要ではないかというご意見は、その通りだと思います。そして、MJIT、日本マレーシア国際工科院はそのためのよい制度だと思います。

その際に、工学のようなハードなサイエンスを考えるならばMJITを活用する方向で進めばよいと思いますが、マレーシアに根ざした新しい技術、あるいは創意工夫といっているかもしれませんが、そちらについても考えるならば、アクマルさんからお話が合ったハラル認証が例えばその1つなのかなと思いました。

アクマルさんは今日はハラル認証そのものについてのお話はあまりなくて、ハラルでどのようにビジネス・チャンスを拡大するかというお話が中心でしたが、ハラル認証について考えてみると、もともとイスラム教に根ざしてはいますが宗教的なものと見るよりもクオリティ・コントロールが重要だという話として見ることもできるし、今では世界の多くの国がマレーシアの制度に学ぼうとしているので、このことをあわせて考えるならば、マレーシアのクオリティ・コントロールが世界から信用されるようになってきたというのがハラル認証の話の肝だと思います。

そのようなマレーシアのクオリティ・コントロールの成果というか象徴がアクマルさんご自身で、それがすべてルックイースト政策のせいだということはできませんが、ルックイースト政策で学んだマレーシア人であるアクマルさんがハラル認証を進めていることには大きな意味があると思います。

■ 両国の事情に通じ、価値観を翻訳して伝えられる 東方政策留学生が通訳に携わる意義

二つ目は、午前中のセッションでも出ていましたが、ルックイースト政策の卒業生がマレーシアの日系企業で十分な働きをしていないのではないかという議論についてです。この問いかけにどう応答するのかを考える必要があると思います。

吉村さんの「日本で学び世界で活躍する」という話とも繋がりますが、ルックイースト政策を日本側から見た場合、恥とか勤労倫理などの日本の価値観を世界にわかりやすく翻訳して伝えてくれることがルックイ

ースト政策の意義と言えるのではないかと思います。

もう少し説明しますと、日本で学んだ元留学生が日本企業で生かされていない、通訳のような誰でもできる仕事をやらされていて、日系企業を辞めて欧米企業に流れてしまうという話がありましたが、通訳は誰にでもできるわけではありません。私も、マレーシアの大学で教えていたとき、マハティール首相と日本の企業関係者の会議で通訳をしたことがあります。マレー語も英語もまあわかるから通訳ぐらいできると思ったら、全然ダメでした。話されている事情がわからないと文脈がつかめないのです、訳せないのです。

言葉ができれば通訳ができるわけではありません。両方の側の事情に通じていて、それぞれにどんな事情があるかを了解して、しかもそこで話されていることの分野に通じているからこそ通訳ができるわけです。ルックイースト政策の元留学生が日系企業で通訳ができているというのは、日本とマレーシアの両方の社会の考え方がわかっていて、日本で学んだ価値観や勤労倫理をマレーシアに則して理解できているということです。どう伝えるとマレーシア人にわかるか、どう伝えると日本人にわかるかを考える過程で、日本で身につけたことを自分なりに「翻訳」しているのだらうと思います。だからこそ、欧米企業に行ってもちゃんと働けるということです。

こう言ってしまうと、日本企業の直接の儲けにならないかもしれないし、日本に留学したのに日系企業で働きたいという希望が叶えられないかもしれませんが、ルックイースト政策には身につけたものを利用して世界に伝えていくという意義があるとも言えるかもしれないと思います。ルックイースト政策の意義を考えるとときにはそういった面にも目を向けていいのではないかと思います。

■ カリスマ的指導者の時代ではない 現代のマレーシアをどう捉えるか

三つ目は、ルックイースト政策が始まった30年前と現代との違いをどう考えるかという話です。マレーシアが経済成長しており、中国や他のアジア諸国が政治経済的に台頭しているとか、相対的に日本のプレゼンスが低下しているなどのことが指摘されています。

1つ1つについては繰り返しますが、そこで挙げられたのとは違う点として、今年10月のアジア政経学会でJAMSの企画で行ったルックイースト政策に関するパネルでの鈴木絢女さんの発表と、昨日のJAMS研究大会の伊賀司さんのお話を聞いて、現在のマレー

シアはカリスマ的指導者が導くという状況ではなく
なってきたと言えるのではないかと考えてみました。

別の言い方をすれば、カリスマ的指導者の動向を
ウォッチしていればその国の行き先がわかる状況で
はなくなってきたということです。もしかしたらマ
レーシアだけでなく他の国もそうなりつつあって、世
界全体がそういう方向に向かっているのかもしれま
せんが、それについては今日の話の範囲を大きく超え
ていますので踏み込みません。

それはともかく、カリスマ的指導者が引っ張って
いく時代ではなくなった状況でルックイースト政策の
意義を考えてはどうかと思いました。これを別の角度
から言うと、ルックイースト政策に引っ掛けて言え
ば、マハティール首相が言ったからやるのではなく
て、個人がそれぞれ参加しながら意義や工夫を考えて
いくことの積極的な意義を捕まえるということです。

■ マレーシアの人間関係の工夫を世界に示すには 日本の人文・社会科学系の研究者の力が必要

これを考えるうえで興味深いと思ったのが、今年6
月にマレーシアで行われたルックイースト政策のシ
ンポジウムで、JAMSからも若手研究者を含めて数人
の報告者がありましたが、特に若手参加者たちの報告
内容が「ルックマレーシア」という観点からのものが
多かったことがあります。

これはアクマルさんの「マレーシアに学ぶ」という
話と重なる部分があると思いますが、ルックイースト
政策が始まったときに生まれていたかいないかとい
うぐらいの若い研究者から「ルックマレーシア」とい
う議論が多く出された背景として、周囲に考え方や生
活習慣が異なる多様な人たちがいて、互いに何を考
えているか外から顔を見ただけではわからない状況で
生活する中で、他人とどう付き合えばいいかという
ことが、日本社会でも、特に若い世代の人たちの間で
けっこう大きな問題になっているのだらうと思いま
した。そういう問題意識を持つ人たちがマレーシアを
研究する中でマレーシアの人間関係の工夫に学ぶこ
とを思いついたのはとても自然なことだと思います。

これがルックイースト政策とどう結び付くのかに
ついては少し工夫が必要ですが、マレーシア社会の人
間関係の工夫を世界に提示することはマレーシアだ
からこそできることとして意義があることだし、でも
マレーシアで生まれ育った人は十分に気付かないか
もしれないので、それを見つけ出す上では日本人のマ
レーシア研究者が重要な役割を担ううと思っています。

ルックイースト政策の今後を考えるにあたり、留学
先に人文社会系を加えたり、予備段階の教育でも人文
社会系の教育を重視する考えも出ているようです。そ
れ自体には賛成ですが、これは日本の伝統文化を学ぶ
ことではありません。最先端の技術を伝えるだけで
なく、相手社会でどの部分が使えるか分析し、それを
マレーシアの人と一緒にマレーシアの文脈で組み立て
なおすことです。このようなことができるのは人文社
会系の専門性だと思いますし、このことは、裏返せば
日本の比較優位として挙げられていた調整能力を基
礎にした協力とも結びつくかもしれないと思います。

■ ルックイースト政策と地域研究者 ——研究と実務を両立するJAMSの可能性

もう一つお話ししたいのは、地域研究と学会の役割
です。6月のマレーシアでのシンポジウム、10月の政
経学会でのパネル発表、さらに今日のシンポジウムで
も、専門調査員や委嘱調査員として在外公館で勤務し
た経験がある比較的若い研究者が、報告者あるいはフ
ロアからの参加者として活躍しています。この人たち
は、マレーシアの言葉はもちろん、歴史や社会や文化
をよく了解していて、そのうえで今日の課題に現場
の事情に則してどう取り組むかを常に考えてきた人
たちで、その意味で地域研究者と呼んでいいと思いま
すが、ルックイースト政策と地域研究者の連携も、も
っと考えてもよいのではないかと思います。

これに関連してお話ししたいのは、川端さんの話で
JAMSが出てきた部分です。川端さんは、研究者と実
務者との連携を考えるにあたって、「実務に責任を負
わない研究者が実現可能性に縛られずに大風呂敷を
広げて放言するだけでは困る」と言いましたが、研究
者と実務者の専門性を考えたとき、私はむしろ大風呂
敷を広げて放言するのが研究者に求められている役
割なのかもしれないとも思います。それを実現するの
は官公庁や民間企業の実務者の専門性であって、大切
なのは違う業種の専門家どうして専門性を同じくし
ようとするのではなく、それぞれの専門性を自覚した
上で互いをどう結び付けるかではないかと思います。

一人のなかに研究マインドと実務マインドを混ぜ
る楽しさ厳しさもあるでしょうし、一人のなかで混ぜ
るのではなく全体で混ぜる楽しさ厳しさもあるか
と思います。JAMSとしては、後者の方の、いろいろな専
門性を持った人が集まって全体で混ぜて1つのもの
を作っていく楽しさ厳しさが追究できればいいな
と思っています。